そう改めて心を固めると、奥歯をギリっと噛んでこぼれそうになる喘ぎ声を必死にかみ殺す。しかし身体は正直な物で、口の端からはよだれが一筋こぼれだし、形の良い乳房の上にぽたり、ぽたりとしたたり落ちていた。

そして、それは下の口でも同じことだった。

『ほう、メス臭いにおいが漂ってきたな……。どうだ、ここもまんざらではあるまい？』

堕天淫魔のいう通り、まだきゅっと締まったままの割れ目の中ではすでに愛液が分泌され、少しずつたまり始めていた。

「ふ、ふざけるなっ、堕天淫魔なんかに責められて感じるなんて、あるもんかっ……」

強がっては見た物の、その声は小さかった。

『ほう……もっと強い責めがご所望か？　ならばご要望に応えてやるとしよう』

フィオナの強がりを悪意にとった堕天淫魔は、さらに触手の本数を増やした。そして足の十指をすべて触手で絡め取ってしまったのである。

「ま、まって、それ、それはやめ……っくひぃいいいいいっっっっ!!」

ナイトシスターの小柄ながらも引き締まった身体が空中でのけぞった。

十本の足指が指の付け根から先端まで、さらに爪の中にまで潜り込んで強烈にしごき上げる。今まで一本の指で感じていた快感電流が一気に十倍になり、フィオナは目を剥いて獣じみた叫び声を上げた。両足の末端から稲妻のような桃色の電流がほとばしり、子宮を焼き、そして背筋を通って脳みそを打ちのめす。

「ふぁぁぁっっ!!　あぁぁぅっ、ぉぁっ、くふぁぁぁあっっ！」

(だ、だめぇぇえ、た、たかが足の指で……足の指でなんてぇぇっ!!)

全身の温度が急激に上がっていくのがわかる。もう股間から下は熱した鉛にでも放り込まれたようで、どろどろに溶けてしまいそうなほどに甘く熱くて、気持ちよくてたまらない。

さらにカモシカのように引き締まったふくらはぎを触手でベロリと舐められ、張りを楽しむかのようにくにくに押しもまれると、そこからも愉悦の大波がわき出してくる。もはや足全体が性感帯なのではないかと思えるほどだった。

その執拗な足責めに屈服し、ついに少女の肉割れが決壊を起こした。プシっという小さな音を立てて愛液がぽたりぽたりと漏れ始め、戦闘尼僧服のグレーと赤のラインで彩られた股間が重い色に変わっていく。

『おうおう、ついに漏らし始めたな？　なら、今度はそっちをかわいがってやるとしようか』

その言葉を聞いたとたん、フィオナはびくっとした。

「だ、だめっ！　そこだけはダメっ、い、今されたら、今されたら……」

どうなってしまうのか？　自分自身にもわからないが、恐ろしいほどの快感地獄が待っているということだけは想像ができた。

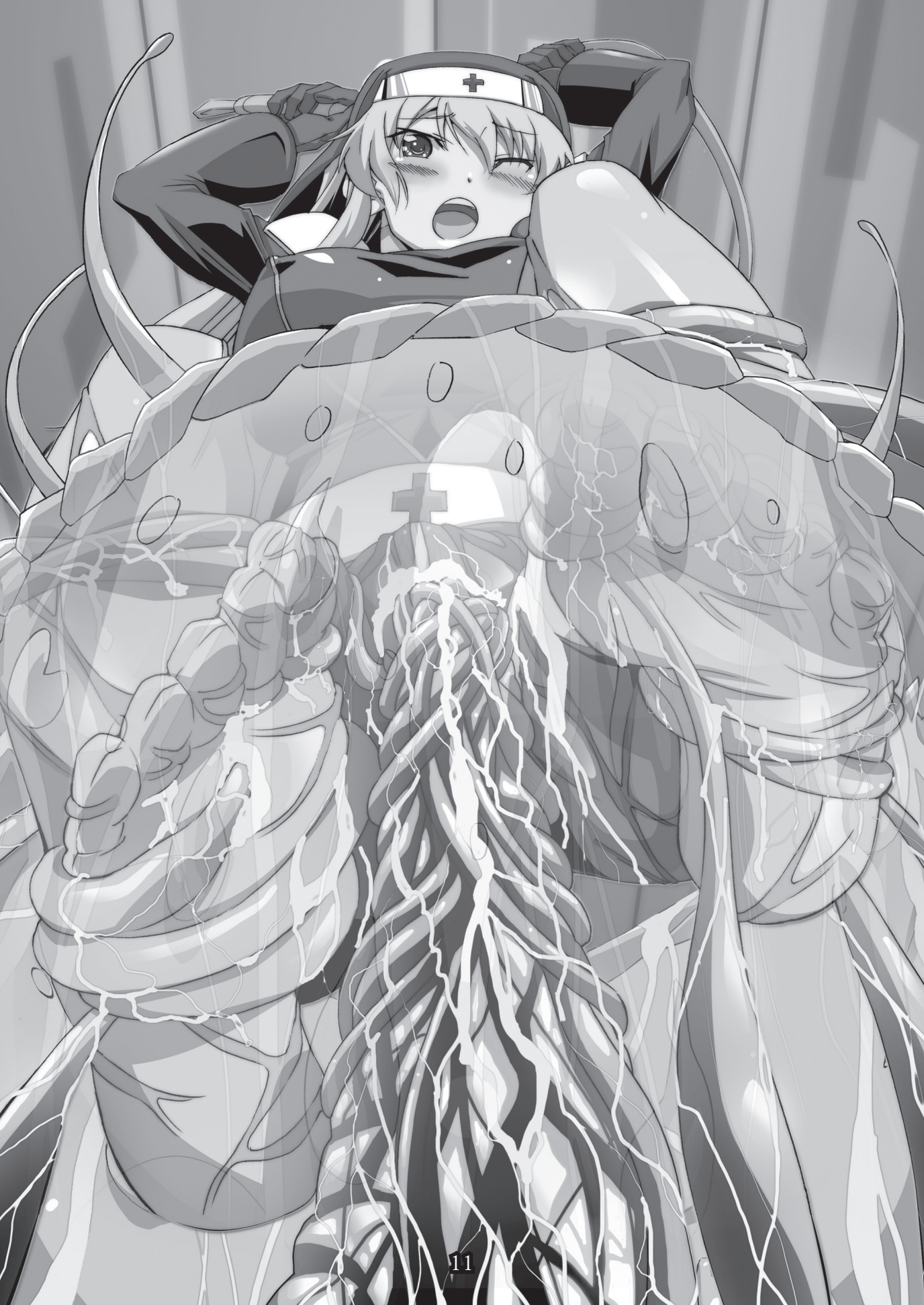
さらなる快楽の予感におびえるフィオナをあざ笑うかのように、堕天淫魔は新たな責め手を送り込んできた。

今度は再び半透明で、まるで鰐口のような頭をした触手だった。口をぐぱぁっと開けると、堕天淫魔の口をミニサイズにしたかのような物が見て取れた。数えることなどできないほど、まさに無数という言葉がふさわしい小さな肉歯。深海生物を思わせるグロテスクさだ。

それが、ゆっくりとフィオナの股間めがけてせり上がってくる。

「っっっっっっぅ……！」

何とか矛先をずらそうと身体を揺さぶってみるが、両足ががっちりと固定されているのでは話にならない。ついにミニ口はフィオナの足と足の間に入

り込み、パクリとかじりついた。
「ひぅんっっっっっ!!」
その瞬間腰の真ん中で極彩色の爆発が起きたような気がした。こりこりとした幾万本の歯が布越しとはいえ、恥ずかしい割れ目にがっちり食いついたのである。
歯は器用にこりこりとアギトを左右に動かしながら、フィオナの淫列を布越しにぱっくりと広げさせてしまった。
口内にたっぷりたたえられた媚薬唾液のおかげで股間はぐっしょりと濡れて張り付き、大陰唇や小陰唇、膣孔や尿孔までもが丸見えになってしまう。下手に触手が透けている物だから、フィオナ自身にもその状態が見えて恥ずかしくて恥ずかしくてたまらない。
しかし、恥ずかしがっているだけではすまなかった。鰐口に生えた数万本の歯が、フィオナの股間を咀嚼し始めたのである。
もぐもぐ、くちゃくちゃとぷりぷりした大陰唇をたっぷりと噛みしめて、小陰唇や膣の入り口までをも食む。
「うあああぅぅぅぅぅっっっっっっ! おっ、おぁぁぁぁっっっっっ、っひくぅっっっっ、はぁぁぁあああっっ!!」
フィオナの小柄な肉体が宙で暴れに暴れた。
目の前で桃色の花火がバチバチと上がり、声を出すまいと噛みしめていたはずの口はだらしなく広げられて喘ぎ声とよだれを滝のように流すばかり。
灼眼からは随喜の涙が止めどなくこぼれだして、フィオナの美しい顔をぐしゃぐしゃに穢していった。
こりこりと噛みしめられた股間からは愛液が止めどなくはき出され、触手鰐口に極上のジュースを提供してしまう。
股間全体を余すところ無くくわえ込んだ口は、前のみならず後ろにも攻撃を仕掛けた。ヴァギナとアナルの間にある八の字筋をぐいぐいと震動させるように押し揉み、型崩れ一つ無いまん丸なヒップの割れ目をこじ開けて、ぱくぱくと開閉を繰り返すアナルまでを噛みほぐす。
「ぉぁあああああああっっっっっっ!!」
排泄孔をえぐられる奇妙な感触、そして隠された性感帯である股肉を媚薬たっぷりのよだれとともに堅柔らかい歯で締め付けられる悦感。前と後ろの快感地点が同時に責められ、それは強烈な悦感の波となって子宮で爆発した。
下腹部が、子宮が煮えたぎるスープ鍋のように熱い。その三点をしつこくしつこく強く、時には甘く噛みしめられると、そのたびに腰がとろけそうなほどの快感美が襲いかかり、上半身をも快楽の炎で焼き尽くされて行ってしまう。
すでに戦闘尼僧服の下は汗だくだくで、一段と張りを増した乳房はキツイ戦闘服の押しつけに負けずにその存在を主張し、コリコリにしこった乳首や乳輪もまた同様だった。汗でぐちょぐちょに濡れた戦闘服は胸にぴったりと張り付き、形が完全に透けてしまっている。何も着ていないよりもかえってエロティックな光景かもしれない。
(だめ……私もうダメ……手が……じんじんして……)
もはや自分の手が鞭を離さないでいるのが奇跡に近い状態だ。堕天淫魔を倒すべく使命を負ったナイトシスターの最後の矜持なのだろうか。
『我の責めにここまで耐えた女は初めてだよ。ほかのシスター共は案外墜ちるのがはやかったからなぁ……。しかし、そのやせ我慢からもう解放してやろうではないか』
最後に残った矜持すらも打ち砕かんとばかりに、堕天淫魔の触手はとどめを刺しにかかった。深海生物の歯のような甘堅い歯列たちが菱形の肉割れの少し上、未だ包皮に包まれたままの肉豆に狙いを定めたのである。

無数の刺客たちがもっとも敏感な性感神経の束を、くちゃ、こりゅっ!!
と噛みしめる。
「!!!　おおおおおおおおおーーーーーーーーっっっっっっっ!!!」
まるで快感爆弾の起爆スイッチを押されたかのように、腰の中で壮絶なまでの快感が弾けた。全身がガクガクガクっと震え、灼眼の瞳が焦点も合わぬままに裏返る。快楽という太い針でクリトリスから脳みそまでを一気に貫かれたかのように鋭い、そして圧倒的なまでの気持ちよさ。
(いん……ま……これが……ほんとうの……いん……ま……)
ほとんど桃色にとろけた脳みそでうっすらそんなことを考える。今までの雑魚淫魔の責めなど児戯に過ぎなかったのだ。これが、本当の淫魔の責め。
(たおさな……きゃぁ……こんな……やつを……いかして……おいたらぁ……!)
無意識のうちに脳の片隅で動き出すナイトシスターとしての本能。かくかくと震える指が、自分の頼れる相棒である聖鞭を改めてぎゅっと握り直す。
だが、そんななけなしの決意すらも堕天の淫魔は徹底的に打ち砕いた。肉フードに覆われたクリトリスをこりゅこりゅと左右にスライドさせるように噛みいたぶっているうちに、包皮がつるんと剥けてその姿があらわになった。それは乳首にも劣らぬほどビンビンにしこりたっている。
その箇所を、柔らかい歯が情け容赦なくかみつぶした。くちゃくちゃくちゃ、こりぃっ!!
「くはっっっっっっっっっっっっっっ……!!!」
意識が一瞬フラッシュアウトした。もう爆発などと言うのも生やさしいほど、圧倒的な肉の快楽。神経の一本一本が快楽の刃で貫かれ、甘く沸騰した血液が通る血管がすべて快感の流れ道になったかのように錯覚する。
さらに三百六十度甘い歯が根本からてっぺんまで、一ミリの隙もなくこすり上げ、噛み込んでいく。
「あーーーーーーーー!　あーーーーーーーー!　あああぁぅうううう!!!」
もうフィオナは子供のように泣きじゃくって首を振ることしかできなかった。
膣孔から止めどなくブシャッ、ブシャッ!　と勢いよく吹き出して、股布を通り抜け淫魔の口に入っていく。
そしてフィニッシュの時は訪れた。口の中から伸びた二本の細い触手が、二つの穴、膣道と尿孔に入り込んだのである。つぷり、つぷり……!
「!!!」
ゾクリっとした感触。その次に抗うことなどできない大波が襲いかかった。敏感な媚肉が布越しに触手でずりゅずりゅと舐められる。肉襞をすりつぶされるたびに、下半身がフィオナの意志とは全く無関係にビクン!　ビクン!
とあらぬ方向へ跳ね返ろうとする。
そして尿道を責めた触手がクリトリスの裏、淫核脚にたどり着き、ずろっとなめ上げる。
「!!!　か……は……ぁ……」
ダブル挿入を受けたフィオナは、もう言葉を発することもできなかった。
世界が桃色に破裂し、何も考えられない。のけぞり返った身体、突き出される赤い舌。そして滝のように流れ落ち、時折勢いよく射精のように吹き出す本気の愛液。
壮絶で、激しすぎる絶頂だった。フィオナの痙攣は十数秒ほど続き、そして力尽きたかのように聖鞭から手が離れた。骨抜きにされた肉体が、堕天淫魔の体内へと飲み込まれていく。
『ふふ……これで終わりとは思わないことだ、ナイトシスター。貴様もナイトの爵を受けたシスターならば、もう少し楽しませてもらわねばな』